

下田市長 楠山俊介殿
下田市教育長殿
下田市議会議長殿

下田旧南豆製氷所についての希望

私たち NPO 地域再創生プログラムは、2004 年の設立年度に初めてこちら下田のまちを視察調査させていただいて以来、そこに発見されたまちの実力ともいべき、数々の魅力に惹かれ、下田の市民とご一緒にいろいろな活動を行ってまいりました。

その中でも、昨今話題になっている旧南豆製氷所については、現地サーバイで初めて発見して、その空間の面白さ、豊かさに驚き、2005 年当時の所有者であった商業協同組合にご相談をして、内部の公開と討論会を行ったことが、その後の市民活動との連携や、景観行政へのご協力につながっていったこともあって、忘れることのできない関わりとなっています。

今回、現所有者の解体への意向が公になりそれに関連して、下田のまちづくり行政へ深く関心を持つ者として、希望を述べさせていただきます。

まず、この旧南豆製氷所に関しては、

- ・伊豆急下田駅、また国道から下田旧市街へのゲートに当たる重要な位置であり、
- ・そこに下田の市民の産業の記憶としてのこの旧製氷所があることの価値は「まちの顔」の存在として大変に大きいとおもいます。
- ・また 80 数年前に、下田市民の有志がお金を出し合って作ったという由来は、コミュニティのルーツのエピソードとして非常にすばらしいとおもいます。
- ・そして、建築的に見ると、今は採掘されていない伊豆石の組積で作られた建築としては、もう二度と作れない規模の建造物としての希少性があります。

そして、これはわれわれの活動以降の 4 年ほどの公開期間に、この場所を舞台に展開された、市民によるまちの元気をつくる活動のよりどころとなる場所としての価値と、案内された市外からの人たち、特に多くのアーティストがこの空間に対して一様に感銘を受け、また何かをここでやってみたいという言葉を発していくことは、この建物の価値の重要な一端ではないでしょうか。

しかしそれとしても、保存活用へ向けていろいろな試みが行われた結果としての今回の解体表明であり、現所有者のここまで負担と心情を考えると、一概に否定はできないものがあります。

残るか、残らないかの対立が、勝ち負けとして、建物の所有者と利用者（保存希望者）のどちらかに傷を残すということはわれわれは望みません。

では、どういう方向へわれわれが希望を持ちたいと考えているか。

ひとつは、この建物と人とのかかわりの記憶をきちんと後の人気が受け継ぐ機会をつくることです。「おくりびと」という映画がありましたが、悼むという行為は亡くなったものの不在以後を生きていく人のための重要な営みです。それに相当することが建築の最後にもあってよいのではないかでしょうか。

その中のひとつとして、これまで所有者への意識のためでしょうが、この建物は「まち遺産」に指定されておりませんでした。現存するうちにできれば市として指定をしていただき、そのこととこの建物を市民に再度認識していただくイベントを開く機会があればと希望します。

もうひとつは、これからのことです。「まち遺産」やその他まだ市内に使われている、歴史の価値ある建造物や場所についても、今後同様な「惜しくも壊されることが決まりました」という状況はやってくるでしょう。しかしその最後とは、急にやってくるものではなく、むしろ所有されている時間の中で、少しずつ苦しさが蓄積してきたものが一線を越えるのだと認識しています。その間、所有者が協力を求める相手が見つからないためにあきらめるケースもあるかと思います。

できれば、そういった崖縁に到達する前に、多くの人が手を差し伸べられるようにしたい。そう考えております。そのためには、それぞれの「まち遺産」の現況、何が問題になっているのかがわからないとなりません。

今回は解体を前提に行われる「調査」を、今後は毎年数を決めて定常的に行い、それぞれの「まち遺産」の健康診断として、それぞれの建物のカルテを市が把握しているような状態になることを希望したいと思います。

このカルテの存在によって、下田市は自らの持っている「まち遺産」の資産価値を把握し、それが滅失しないように予定を立てることができます。また市だけでなく、今回の旧南豆製氷所の 4 年間のように、市内市外の市民の協力による支援のネットワークとしても機能させることができるかもしれません。

私たちがひきつけられた、下田のまち、「まち遺産」に歩いて出会えるまちの魅力が未来に引き継がれていくために、旧南豆製氷所の問題に関連して考えております、これらの件について市、教育委員会、議会にてご一考いただけますよう、希望いたします。